

それを聞いて、妻の伊耶那美命は「わたしはもう黄泉国の食べ物を食べってしまったので、もう帰れないの」、「でも黄泉国の神様に掛け合つて見ます。けど、その間私の姿を御覧になつてはいやよ」と答えて女神は御殿の中に入つて行つた。

残された男神は、とても長く待たされた上に、その辺が、とても暗かつたので、髪の方の左の方に挿していた、神聖な爪櫛の太い歯を一本折つて火を灯して中に入つたのでした。

そして、「あつ」と叫ばれたのです。

『頭にも胸にも陰部にも手足にも、蛆がごろごろと沸くようにおり、併せて八種の雷神がとぐるを巻いているではありませんか』

伊耶那伎命は愛もなにも褪め果てて、逃げ帰ろうとしたその時に「貴方を見るなという約束を破つて、よくも私に恥をかかせたわね、黄泉国から無事に帰ろうと思つたら大間違だよ」と叫ぶのでした。

そして黄泉醜女たちに命じて、男神の後を追わせたのでした。

とても敵わぬと思つた男神は一生懸命に逃げながら、髪飾りの蔓草を取つて棄てると、たちまちにその辺に広がつて山葡萄の実になつたのです、また追いつかれそうになつて、右の角髪に挿していた、神聖な爪櫛の歯を折つて、走りながら一本一本を棄てて行くと櫛は忽ち筍になつてしまいました、その筍を食べている間に更に遠くに逃げたのですが、女神は、くやしがり、自分の体にとぐるを巻いていた、八種の雷神に黄泉国の軍隊を付けて、追い駆けさせるのでした。

遂に男神は腰の剣を抜いて、後手に払いながら逃げたのです。

命からがらの男神は、やっと現世と黄泉国の境の黄泉比良坂の麓まで辿り着きました、ふと見るとそこに桃の木があり、実をつけている。

その実を三つ取つて、待ち構え雷神に投げたのです。

すると黄泉国の軍勢は桃の持つ呪力に押され、どつと逃げ帰つたのです。

坂を登つてしまつたここは現世です。

ところが今度は女神自身が追いかけてきたのです、そこで男神は「千引きの岩」を黄泉比良坂に引つ張つて来て道を塞いだのです。

そして、男神は女神に対して「愛は断られた」事を告げたのです。

女神は『私のいとしい夫よ、あなたつてひどい仕打ちをなさるのね、いいわよ、こんなことをなさるのなら、私は貴方の住む現世の人間を一日に千人絞め殺してやるわ』と

それに対して男神は「いとしい俺の妻よ、お前がそんなことをするのなら、おれは一日に千五百人の子供を生ませるさ」と答えた。

こういう理由で、この世に於いては一日必ず千人死に、千五百人が生まれるのである。

黄泉比良坂は、現在の出雲の伊勢夜坂だという。